夕立のあとやすゝしき松の音　栃木　東旭
夕立やしばし軒端の裏見瀧　東京　いづみ

軸

點者　夜雪庵

待網や簀や夜立跡の川

正誤、前號宗匠の句中蟬は蜂の誤なり

布教通信

西征錄（つゞき）

於漢城駱洞　田中座外隨行筆記

韓の學生

予は一二の學校を參觀して、その甚だ意外なるに驚き、韓人教育の至難なるべきを察し、而して其の勞多くして功果太だ少なからんを疑ふに至れり。說をなすもの多くは、今後十年を經過するにあらずんは到底文明の空氣を吸收すべき能力を有するに至らざるべし、今は唯た寧ろ他働的に强迫的に義理ヅクニ已むを得ずしてこの新天地に導かれつゝ、泳ぎ出さんとつゝしつゝあるものにして、眞に憐むに堪えたるものなりとなす。然り實に然り、之を實際に見聞し之を當局に叩く亦た悉く爾か感せざるを得ず、頃日聞く所によれば本邦に遊學せる學生中、多くは怠慢遊惰にして授業中坐睡談笑を以て事とし、甚たしきに至つては戸棚押入に躲れて出席せざるものあるに至る、と何等の醜狀ぞや。

外部大臣金氏曩きに遊學生を送るに序あり中に曰く。

三家村裏、日聞二誦讀之聲一、而狃二於習慣一、扃二於聞見一、終不レ能レ成二遠大之器一、此古人所下以負レ笈從レ師不中憚二遠遊一者也、我國與二日本一、俱處二東海之中一、政教制度、互相倣效、自レ昔已然、及二夫泰西開明一以來、日本在二亞洲一、首先代興、我國與レ之協レ心同レ德、建二自主獨立之基一、革二弊政一、振二頽綱一、尤以二養才需用一爲二急務一、是れ第一節に於て言ふ所、而して又其の中段に於て古人云、有レ志者事竟成、昔終二生棄擲一、司馬題レ柱、終能踐二其所レ言者無一他、有レ志焉而已、我國之士、久失二學業之路一、浮談游食、以誤二其身一、國勢之不レ振、職由二於是一、今諸生等、離二親戚一、去二卿井一、浮二海遠學一、其志壯矣、苟能不レ變二此志一、積以二歲月工夫一、必充然有レ得、而歸上可二以報一、

と說く、惇々として眞情を吐露す、韓の諸生たるもの

須らく其神に銘し決して忘るべからざる語なり、而るを何ぞ彼れか如く怠慢にして無狀なる、是れ君親を忘れ身家を忘れ國恩を忘るゝ者なり、將た何を以て復た故國の山川に對せんとする、予等か漢城に入れる前數日、京城書師範學校生徒か同盟して不時に退校を企て掛官教員等の盡力にして僅に其の三分の一丈は引止めたりといふ事ありき。右は先般小學校教員に欠員ありし時、之を師範學校生徒の内より取らすして、突然某地方の朴某といふ田舍先生を擧げ、小學教員と爲したる事第一不服の原因にて、據て加へて此程官給の晝飯を、費用節減の爲め廢するの達ありしを以て、生徒は此上は在校するも前途の見込みなしとて、さてこそ退校を企てたるものなるよし。目下朝鮮の教育一日も忽諸にすべからざるの時に際し、學生等這般瑣少の事に口實を設け不時退校を企つるなど到底國家を思ふの感想なしといふも亟言に非さるか如し、於戲如何にせは可ならむか、顧問を始め當局者の苦心察すへきなり、彼等は終に所謂濟度すべからざる衆生なる乎

韓の諺文

予の韓京に入るや、其の市街を散策して諸の物を見、諸のものを聞けるか中に、我國の最も古き時代に用ひしと聞く所謂神代文字に髣髴たるもの、到る處商店の軒頭に記されたるを見き。之れ即ち朝鮮の諺文なり、予は本國に在て嘗て朝鮮に諺文といふものありて頗る本邦神代文字に似たるを聞き、且つその本邦より移し教へたるものなりといふものあるを聞けり。而して未た實際に見るを得さりき、然れとも予は又た彼れ韓人は實に我邦人か神代文字に於けるか如く寺院或は舊趾等に古くより傳はれるもの、外、普通に使用しつゝあることは迂濶にも氣付かさる所なりき、今や始めて此地に入り矚目一番各戸軒頭に記載するのみならす、現時本邦人の編輯に係る隔日發行の『漢城新報』は其の半面悉くこの諺文を以て記述し、而して韓人の購讀に便ぜるなど、殆んと本邦の假名の如く使用し居れり、予は一日李雲景と稱する韓人の來訪するに會ひ、筆談適〻朝鮮諺文の事に及ひ、アイウエオの順序に隨ひ予か發音に應して彼れ之を紙に寫し、漸くにして僅かに五十音を得たり左に之を記せむ。

아 이 우 에 오　アイウエオ
가 기 구 게 고　カキクケコ
사 시 수 세 소　サシスセソ

다 디 두 데 도　　タ チ ツ テ ト
나 니 누 네 노　　ナ ニ ヌ テ ノ
하 히 후 헤 호　　ハ ヒ フ ヘ ホ
마 미 무 메 모　　マ ミ ム メ モ
야 이 유 예 오　　ヤ イ ユ エ ヨ
라 리 루 레 로　　ラ リ ル レ ロ
와 위 우 에 오　　ワ 井 ウ エ チ

其の文字の組立法の如き、本邦の假名よりも甚だ易きが如し、而して右の如きものを以て猶ほ幾百の文字を形造り、且つ發音本邦と異なるありて喉音及ひ舌音の如きは寧ろ西洋各國に類し、容易に習ひ入り難き感あり。昨年丸山作樂氏渡韓の折、仔細に取調へたる由なるも未た親しく聞くことを得す、

韓の人心

昔者春秋の時、吳の公子季札出でゝ光を各國に觀る、其の鄭に至るや嘆して曰く民其の細に堪えざるは何ぞや、蓋し鄭衞は小邦にして其の俗淫冶柔儒、其の政煩瑣苛酷、頽焉として振はす。輕佻風を成し陰詐俗を成す、濶達、寛厚、剛直、正大の氣風の如き蕩然として地を掃ひ嘗て自主獨立の氣象あるなし、と、吁、何ぞ方今朝鮮の情勢酷だ鄭國に類せるや。士に氣節なく俗に廉耻無し、桑間淫靡の俗は或は未だ鄭の甚たしきに至らすと雖とも政道苛酷の弊は却て鄭よりも甚たしかりしか如し、若し其れ士夫の遊惰閑放なる滔々として風を成し古今希れに見る所となす。士は學問功名に奮はす、民は殖產興業に力めす、亦た何ぞ怪まむ今日の積羸積弱を馴致せしを、局に當るもの須らく奮勵自覺せさる可からす。蓋朝鮮の俗、柔弱怯惰なる上に加ふるに殘忍刻薄、朋黨相搆排し、親疎相搆陷する恰かも雲を翻へし雨を覆へすか如し。且其の人命を輕んし些の人情無き最も甚だし矣。此弊止ますんば則ち朝鮮の人心未だ振起し易からさるなり。人或は謂ふ、國小にして民細なり、是れ免かれざる所なりと。朝鮮の地方數千里、之を古の齊楚秦晋に觀るも、猶ほ泰西の如荷蘭、如噸馬の諸國の如き其の人口土壤共に朝鮮よりも小なり、而して自主獨立は國の大小廣狹に關せす、之れ素より人心に在り、適證眼前に來る、見よ、今回の日淸戰爭を、孰れか大にして孰れか小なる、其の人心の如何は言ふを須たす。吁、朝鮮の人心、庶幾くは宗教家の手を藉て改悛の域に到るを得んか。

佛耶の運動

朝鮮の宗教に關しては殆んと云ふに足らず、其の一斑の如きは既に諸新誌に於て報せられたるか如し。中流以上の者多くは頑弊なる佛教を信し、他は皆な無宗教の有様にて、僅かに孔子を祭り關帝を祀る位にて一の宗教らしき躰裁を具ゆるものあるを知らす、佛教徒夙に韓に志せるものなきにあらすと雖も、未た左したる運動をなせるを聞かす、唯僅かに釜山、仁川等に本願寺派及ひ日蓮宗の事務所の如きを設け居留人民の信者を會する位に留まれり。目下は京城にも頻りに運動中なるよしなるが前報に略ほ記し置ける彼の僧侶京城に入ることを得ざるの國禁を解ける一事、非常に官民の注意を喚起し、日蓮宗の僧佐野前勵氏の熱心なる且つ敏活なる運動には流石の本願寺派も捲舌の姿なりき。氏は先つ韓京に入りて本邦の各顧問或は新聞記者の贊成を得、大に韓廷の各大臣を説き、遂に宮内大臣へ宛て法華經を奉献し、彼の五百年來の舊習を解き、南北兩漢山の僧侶數百を會して、國恩祈禱會を京城内に開けり、而して佐野氏の歸朝するに際し二三の韓僧、日本遊學を望み同行するものありき。兎に角佐野氏の日蓮宗に盡せる功偉大なりと云はさるを得す。基督教の運動に至つては實に微々たるもの、如し、居留人民の二三、日曜に會して僅に祈禱をなせるを見受けぬ、左れと例の外國宣教師の入込めるもの隨分澤山にて彼等の居留地に英語學校を起し數年の久しき彼等慣用の好手段たる教育の中に誘引するものあり、頃日某外人か非常の熱心を以て巍然たる教堂の建築中なるありき、

我黨の運動

予が數回に渉れる通信の上に於て、韓の蠻風、韓の醜俗、韓の特質、韓の人心、悉く皆な我が親愛なる讀者諸君の知る所たらむ。而して之を讀み之を聞くと同時に且つ此の他の新聞雜誌に依ても如何に我が政府當局者もこれが改革の救濟の道に苦心せるかを知らむ、其の外形皮想上の改革すら猶ほ且つ甚た難しとする所、況んや其の人間最高の心靈に訴ふる、根抵的改革言ひ換ふれば即ち大道を説き眞理を誨ゆる底の事業に於てをや、之れ無論予等が渡韓以前に於て期せし所のものなりしと雖も、躬ら此地に來り斯民に接し其の豫想の外なるに驚き、殆んど茫然として自失せんと欲す、嗚呼予等は果して自失に畢れる乎將た又た終に爲す所あ

らずして已まむ乎、否な、否な決して已む可からざるなり、

着韓後予等は徐ろに視察せり、靜かに觀察せり、私かに有志と談せり、而して又た有力家を訪けり、幾多困難なる事情の爲めに滯韓日數の餘りに永からざりし割合には、種々なる方法を以て運動せり、然りと雖も予は今ま讀者に向つて深く謝せざる可からざる一事あり、何ぞや予等は前述の如くにして其の重且つ大なるの責任を塞がむと欲せしも甚だ充分なる結果の一をだも玆に記述して讀者の一顧を煩はす能はざるの事是れなり。豈に遺憾の極にあらずや。

予は猶ほ委しく讀者に謝せむ、此事たるや元來韓人に施かむよりは先づ前に本邦居留民を團結奉信せしめざる可からず。而して又た言語相通ぜず、彼我相交らず固より短刀直入以て韓人を敎ふるの道なく爲めに能く韓語を繰り多少の交際を有せざる可からず、況んや彼韓人は頑固なる儒敎と腐敗せる佛敎との外、未だ純然なる宗敎なるものを知らず、正鵠なる德義をも解せざる者なるをや、而して其の僅かに客年來戰勝の餘威を藉りて比較的少數なる本邦人の渡韓して以て彼等と相知れる今日に於て邦人すら猶ほ且つ未だ悉く信ぜざる神道を布敎するの如何に困難なる事業なるかを想へ、尙ほ況んや彼等上流の人士僅かに本邦を信じ其の中以下の士民に至ては或は恐れて服するもの、或は中心我を信ぜざるもの、所謂五里霧中に彷徨せるもの其の多きに居れる現況なるに於てをや、之に加ふるに韓山の風雲程殆んど端倪すべからざるものはあらむ、內閣の動搖すると浮萍の漣漪に於けるが如く、朝變暮改、隨ふて人心洶々、予等が滯在中も亦た種々の風評は市の內外に喧傳せられ、又た根も無き說にさへ動かされて韓人の狼狽するもの甚だ多く本邦居留民も爲めに營業上に非常の影響を蒙り中々他事を顧みるの餘裕を有せず、以上述ぶるが如き事情は予等が暫時の滯在中に讀者に資らすべき所の結果の一をも得ざりし理由なりけり、然り而して予は大に感悟せる事あり此地斯民に敎ふるは兎も角苟くも歩を海外に出し敎を寰宇に擴張する亦た內地に於けるか如き布敎の方法を以て事の到底成すべからざるを感ぜり、神道合同の事は予が宿論なり今や我國の神道なるもの分れて十數派たり、而して其の主義精神は必らず大同にして少異なりと云はざるを得ず又た必ず然かあらざる可からざるは固より惟神の大道なるか故に、眞理は決して二あらざるが故に。

殊に海外に向つて其鋒を進むる須らく化して一團となり突貫せざる可からず、其の聯合する能はざるが如きは些少の情實と從來の積弊との然らしむるものにして是れ太だ道に忠ならざるもの思慮の足らざるものと云はざる可からず、予は斯く感じて而して朝鮮傳道の事先づ神道の聯合軍を組織し能く計畫し能く考量し能く本末を察し能く終始あらしめざる可からざるを悟りぬ、是に於てか事の甚だ急速なる能はざるを思ひ靜かに運動の歩を進めぬ、茲に予の最も喜びに堪えざる事あり、そは我黨の有志にして我より先、既に已に朝鮮傳道の計畫あること是なり、神宮敎は已に運動に着手せし京城に敎會所設立の寄附等を募り居留民諸氏も寄り〳〵贊成の意を表せしよし而して是より先き、黑住敎片山某は數回渡韓在京して大に官民の間に盡力し京城に皇大神宮神殿及び敎會所、仁川に敎會所を設置する目的を以て既に多數の贊成を得、寄附金等も意外に集まり居るも未だ充分ならざる所あり、且つ韓山の風雲甚だ惡しきが爲めに同じく暫時見合の姿となり居れりといふ、神宮黑住の二敎既に此の如く計畫に着手し而して今や二つながら中止の有樣なること予等が領事館に顧問官に有志家に有力家に奔走せる間に耳にせる所のものにして予か前述の感を起せる所以の原因たり、而して予等の說けるもの亦た合同一致の運動あらむことを慫慂して止まず前岡山縣中學校敎授木村知治氏の如き領事內山氏の如き顧問野々村氏の如き有志高橋氏の如き又た熱心之に贊し充分抱助盡力すべきを誓へり、予等是に於て意を決し鞏固なる神道聯合軍を組織し以て充分なる布敎の方法を企畫すべきを約しぬ、飜つて想ふ內地の各神道家果して國を思ひ道に忠にこの大同團結の實を擧げ以て斯道を宇內に擴恢するの目的を達せしむるや否やを、

仁川に兵站部を見舞ふ

予等意を決し猶ほ後事を木村野々木高橋の諸氏に托して、五月十八日茲に韓京を辭す。前日に懲りて二頭の馬を曳き來らしめ、午前八時仁川に向つて發す、慣れざる馬の荷鞍を着けたるが上に突兀たる嶮路を上下して午后六時頃仁川の旅店大草に着し、而して本邦に向つて出帆する滊船を問へば明日午前十一時といふ、乃ち仁川兵站部を見舞ふ、部長折惡しく不在にして副官田中中尉に面し來意を告げ携ふる所の慰問品を贈る、中尉は部長に代り、いと懇篤なる謝辭を述べ猶ほ居室

に延て茶菓を饗せられ談時事に渉り慷慨し哄笑し、數時にして辭し去り旅宿に、明曉を待て眠る、

歸朝の途に上る

五月十九日、午前十一時、日本郵船會社瀛船駿河丸は釜山對州を經て長崎に向ふ、海上二晝夜船の釜山に入るに及び直ちに端艇を便して上陸し、

釜山守備大隊を訪ふ

時正に午前七時、隊に宿直あり、刺を通して來意を告げ携ふる所の慰問品を贈り談亦た時を移しぬ、出帆の期迫るを以て急ぎ本船に歸る、航海又た一晝夜對州嚴ヶ原に寄港す、海天髣髴、南方遙に臨む故國の山、

京阪地方巡回日記

大石眞作

這度、廣瀬監督が京都に於て開會せらるゝ日本弘道會總集會に、西駿支會の代表者として臨席せられ、兼て遊說せらるゝ故愚老荷持の行として隨行せり。

五月一日廣瀬監督の家を出て藤枝停車場より乘車、一日にして京都に到り、三日より五日迄、日本弘道會議に臨席。六日、官幣大社平安神宮に參拜。七日、京都府敎長三上天民氏を訪問す。氏は只一人道を勤めて自若たり。昔し八代尊師京都を開き給ふときには、京行子抔ありて、醍醐宮をさへ勸化せられ、終に九代の師家を讓らるゝが如き盛大を極めしに、身祿世の信心今に來ると待々て、終に身祿の世なる明治聖代になりて更に跡形も無く、行子の衰頽を見るは、實に遺憾の至りなりと談せしかば、三上氏答て、迚も我一人にして力及ふ能はず殊に親父存命の時、我れ五十に至らされは布敎を爲さぬと約したるとありたれは、是迄獨行致したりと云、監督云、君は本年幾年なるや、答、四十九年なり、尊父神逝以來幾年なるや、十五年なり、然らは君の本願の年到來せしに非すや、愚老今日幸ひ來る、是れ尊父に代り、生前契約の履行を促すなり、願くは道の爲めに年來の修行を實施せられたし、於是氏大に悅ひ、いかにも今日より憤發し、飽迄提撕の勞を執らんとて、即日父氏十五年の靈祭を執行して、彌々開敎の志を立てられたり。元來父氏は開明の敎義を主張して十代の尊師と共に各地を巡敎せらるゝ抔、實に本敎元勳の敎師たりき。此師の遺墨とて敎歌一首あり。

息は風眼は月日腹は星